

福永家文書目録解題

福永家の初代は、福永彦左衛門といい、元和5年(1619)、高田藩へ入封した松平忠昌に随って高田に来住したが、その後士籍を離れ商人となって直江津今町の新町に住み、越前屋という家号で廻船業を営んだと伝えられている。延宝9年(1681)、松平光長家改易後の高田城勤番時代に、越前屋福永彦左衛門が直江津今町の大庄屋となった。その後も代々、直江津今町の大年寄や大肝煎等の町役人を勤め、幕末を迎えた。なお、幕末のころは酒造業を営んでいた。

福永家7代目の十三郎は、直江津今町の大肝煎を務めたが、寛延4年の大地震で大きな被害を受けた高田榊原家に度々才覚金を用立て、郷土格「御勝手方御内用」に任命された。

宝暦10年(1760)魚販売の特権をもつ高田の田端町との間に四十物(あいもの・干物魚販売)出入を起こし、同年の7月に勝訴した。その後安永年間にも生魚(鮮魚)の販売権をめぐり再び田端町と出入りを起こしたが、係争中に死亡した。直江津今町の魚売りたちは、十三郎が田端町の問屋商人に毒殺されたと思い、火葬場の残り灰をもらい受け、「灰塚地蔵」を建てて十三郎を祀った。それに由来するのが現代の上越市中央4の福永神社である。

8代目福永彦左衛門は、今町の発展のために力をつくしたが、驪彭・里方と号し、俳人としても活躍し、良寛の父・橋以南とも親交があった。

11代目福永弥兵衛は、安政元年(1854)に15歳で大肝煎見習になり、文久2年(1862)に23歳の若さで大肝煎となった。明治3年(1870)からは名を弥平と書き方を改めた。幕末から明治維新の大変革期に町政を担当し、明治12年に新潟県第八大区の副大区長と小区惣代の職を退いた。

直江津今町は、関川河口左岸の砂丘上に密集して家が建っており、冬の季節風や春から夏にかけての南風やフェーン現象によって大火となることが多かった。このため「出火之節詰人足」が定められており、福永家には、新町と本砂山町から2人ずつ、計4人の詰人足がかけつけ、直江津今町の大肝煎文書の入っている桐ダンスや長持を搬出した。福永家文書はこのようにして守られてきた大肝煎文書で、第2次世界大戦後福永家から直江津町へ、平成6年(1994)、上越市立高田図書館へ移管された。平成24年上越市指定文化財となった。



「田端町所持之書付之写右返答存寄之覚」福永十三郎(宝暦10年5月)
肴専売争論関係資料